

宿泊客残した服で ランウエー

旅人たちの「置き土産」に、地元の高中生らが新しい命を吹き込む。世界的観光地の岐阜県高山市で8月、「サステナブルファッションショー」が開かれる。ホテルの宿泊客らが残していった衣服を生かす試みで、障害者福祉施設に通う人たちがモデルを務める。

色もサイズもばらばらな古着が積み上がった被服室。「グレーの中でもどんな色味が好きですか」「フリルをつけてもいいですか」。5月下旬、飛騨高山高岡本キャンパスで、生活デザイン科ライフデザインコース3年の12人が、就労継続支援B型事業所「はたらくねっと」（同市）の利用者と語り合っていた。好みを聞き、古着を広げてデザインを思い描く。服を合わせて「似合ってる」「かわいい」と声をかけると、利用者は照れ笑いを浮かべた。

使うのは、市内のホテル「KOKO HOTEL 飛騨高山」の回収ボックスに寄せられた衣類。客室に放置されることが増えたため、昨年、ボックスを置いた。1週間で45袋いっぱいになり、福祉施設などへ贈ってきた。

総支配人の奥田晋一さん（57）は、寄贈にとどまらず

高山のホテル 提案

「地域の学生に福祉と関わる機会を持ってほしい。卒業後は多くが地元を出ていくが、高山でも面白いことができる」と実感してほしい」と願い、飛騨高山高にファッションショーを提案。探究活動の授業で、残された衣類をもとにアレンジしたり、生地を取ったたりした衣装を作ることになった。当初、モデルの体形や好きな色といった簡単な情報を基に制作する予定だった。

た。だが、生徒から「似合う服をつくるために実際に会いたい」と声が上がリ、対面の方ができた。

「アイデアがどんどん浮かんできた」と鈴木来実さん（17）。角川有香教諭は「普段はおとなしい生徒が、すてきな服を作りたいという思いで積極的にコミュニケーションを取っていた」と驚く。

はたらくねっとの利用者たちは普段、土産品のぬいぐるみの綿詰めやホテルのベッドメーカーキングなどに従事する。広報担当の高熊美加さんは「本当は目立ちたい思いがある人たちが、障害があることで機会が少なかった。だからこそ、ショーを大成功させてほしい」と期待する。

荷物減らすため放置か

高山市の観光統計によると、2025年の市内の宿泊者数23万2千4百人のうち約4割を訪日客が占める。訪日客の増加とともに、宿泊施設では衣服や靴が客室に残されるケースも増えているといい、関係者は対応に苦慮している。

江戸川大の崎本武志教授（観光学）は「空港などで壊れたり買い換えたりしたとみられるスーツケースが放置される例はあるが、衣

服について都市部ではあまり聞かない」と前置きした上で「高山のように国際空港から遠い観光地は、移動の負担が大きい。土産などを買って増えた荷物をどうにかしようと、放置しているのでは」と推しはかる。

市内のホテル関係者は「忘れ物か不要になった物が判断できず、保管場所を確保するのが負担」と漏らす。遺失物法に基づき、引き取りがなければ警察に届け出る必要があるが、持ち主が来ることはほとんどなく、多くは各宿泊施設が定めた保管期間を過ぎた後に処分しているという。

ファッションショーの取り組みについて崎本教授は「廃棄物になるものをリユース（再利用）するのは、持続可能な開発目標（SDGs）の観点からも評価できる。教育的にも意義のある先進事例」と評する。

⑤施設の利用者⑥と話しながら衣装の構想を練る生徒 ⑦回収ボックスを紹介する奥田晋一さん。「高山でも面白いことができると実感してほしい」＝いずれも岐阜県高山市で

